



年間第 20 主日 (ルカ 12:49-53)

硬く冷たい心を溶かす火を投じる

記録的な暑さと、記録的な新型コロナの感染者を日々体験している今年の夏です。この年間第 20 主日と次の聖母被昇天、手短に説教を終えたいと思います。かつて主任司祭であった川添猛神父様は 3 分で説教を終わった「猛者」ですが、そこまではいかなくとも、今日は早かったなあくらいにはしたいと思います。ひょっとしたら天国の川添神父様も、「お一、暑かせん、そいがよか」と言っておられるかもしれません。

私が子供の時、簡単な釣り道具は父親が作ってくれていました。アラカブ（カサゴ）釣りをするような釣り道具です。竿は切ってきて乾燥させた竹竿、道糸はヨマと呼ばれる漁師の網を修理するためのエンジ色の紐、ハリスはナイロン、針は何百本も袋に入った大きめの針でした。

これに一つ足りないのがオモリですが、父親は定置網で使用する鉛を少し切って、それを溶かして思い通りの形に整えて取り付けてくれました。それが釣り道具の基本でした。ただ父親は当時遠洋漁業でしたので、すぐ船に乗っていなくなります。そこからは一度だけ見た道具作りを、自分で再現する日々です。

竹竿、ヨマ、ハリス、針はあります。しかしオモリがありません。そこで父親がしていた通りに、定置網用の鉛を切って、缶詰の缶に入れ、台所のガスで溶かしてみました。鉛の融点は 327.5 度です。子供でも溶かすことができました。しかし思い通りに成形することができず、苦勞した記憶があります。

これは一つの例です。鉱物には、すべて融点があると思います。スズとか、溶けやすいものもありますが、多くのものは簡単には融けないでしょう。イエスは「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」(12・49)と言われました。あらゆるものを溶かし、神の御望みの形に整えるために、イエスご自身が火を投じに来たのです。

その火は簡単に燃え移り、中から溶かしたかというところではありませんでした。弱い立場にある人々には火が燃え移り、硬い心を和らげていきましたが、指導的立場にある人たちは冷淡な態度をとりました。子供のような心で受け入れることができず、火は燃え移りませんでした。そのため、苦しみと死を通して、ご自身を燃やし尽くされたのです。

私はかつて、信仰の火は投じれば簡単に燃え移るものだと思っていましたがそれは間違いでした。中には相当アルコールを注ぎ足さなければ燃えない人もいました。結局くすぶって燃えない人もいました。

心を溶かし、神様の望む生き方に人を導く。そういう司祭の完成形はまだはるか先です。けれども、私自身の命を差し出し、燃やしてでも、一人でも多くの人々の心を燃やして、神様の望む生き方を選ぶ信者に導いていく。それが、変わらない私の使命だと思っています。一人ひとりの心の融点まで、共に歩んであげたいと思っています。